

大会あいさつ

みなさん、ようこそ新座母親大会にお集まりくださいました。

私たちは、1975年から、毎年、新座母親大会を開き、今年で第34回大会を迎えることができました。

これも、地域のみなさんのご支援によるものと感謝いたします。

新座母親大会を開催する私たちは、地域の子育てや教育、男女共同参画、福祉、労働、環境、平和など、私たちの暮らしをよくしようと、草の根の活動を積み重ねている13の団体や個人から構成されています。

母親大会の起こりは、53年前の杉並区の母親たちの読書会から始まった、アメリカの原水爆実験反対の署名運動です。

その年をきっかけに、「いのちを生み出す母親は、いのちを育て、いのちを守ることをのぞみます」というスローガンを掲げて、母親たちのいのちと暮らしと平和を守る運動が、現在まで各地で53年間続けられています。

さて、今年、ヒロシマ・ナガサキの被爆から、終戦63年目の夏を迎えましたが、いま各分野で、戦後を見直そうとする反動的な動きと、戦後の平和と民主主義を守ろうとする動きが拮抗しています。

戦争の反省から生まれた憲法第9条を改定しようとする動きは、昨年改悪した、教育基本法と連動しています。

戦争を知る世代が減少していく中で、戦争の本質を知らせていくために、昭和の戦争の記憶を掘り起こし、若い世代に伝えていかなければならないと強く感じます。

いま、私たちの暮らしは不安の中にあります。年金や医療制度に対する不信や不満、子育て、景気や雇用への不安も消えません。

働いても収入が少なく、まともに食べていけないワーキングプア=働く貧困層が増えています。

社会を支えるはずの若い世代が、自分の暮らしも維持できない。これが私たちの目指す社会だったのでしょうか。

このあとの記念講演で、竹信三恵子さんのお話をお聞きして、ご一緒に考えていきたいと思えます。

第34回新座母親大会実行委員長 竹森絹子